百人一首

１　秋の田のののをあらみ　わがはにぬれつつ

２　春すぎてにけらしの　ほすてふの

３ あしびきのののしだりの　ながながしをひとりかもむ

４　のにうちでて見ればの　のに雪は降りつつ

５　にみけ鳴くの　声聞く時ぞ秋は悲しき

６　かささぎのせる橋に置くの　白きを見れば夜ぞふけにける

７　のふりさけ見ればなる　の山にでし月かも

－34－

８　わがは都のたつみしかぞすむ　をうぢ山と人はいふなり

９　花の色は移りにけりないたづらに　わがにふるながめせしに

10　これやこの行くも帰るも別れては　知るも知らぬもの

11　わたの原かけてこぎでぬと　人には告げよの

12 つ雲のかよひき閉ぢよ　をとめの姿しばしとどめむ

13　のよりつる　ぞつもりてとなりぬる

14　のしのぶもぢずりゆゑに　乱れそめにしわれならなくに

15　君がため春の野にでて若菜つむ　わがに雪は降りつつ

16　立ち別れいなばの山のにふる　まつとし聞かば今帰り来む

17　ちはやぶるも聞かず　からくれなゐに水くくるとは

18　のの岸に寄る波よるさへや　夢のひ人目よくらむ

－35－

19　短きのふしの間も　はでこの世を過ぐしてよとや

20　わびぬれば今はた同じなる　みをつくしてもはむとぞ思ふ

21　今来むと言ひしばかりにの　の月を待ちでつるかな

22　くからに秋の草木のしをるれば　むべ山風をといふらむ

23　月見ればにものこそ悲しけれ　わが身ひとつの秋にはあらねど

24　このたびはもとりあへず　の神のまにまに

25　名にしはばのさねかづら　人に知られでくるよしもがな

26　のもみぢ心あらば　今ひとたびのみゆき待たなむ

27　みかの原わきて流るる　いつ見きとてかしかるらむ

28　山里は冬ぞさびしさまさりける　人目も草もかれぬと思へば

29　心あてに折らばや折らむの　きまどはせるの花

30　のつれなく見えし別れより　ばかりきものはなし

－36－

31　朝ぼらけの月と見るまでに　の里に降れる白雪

32　に風のかけたるしがらみは　流れもあへぬなりけり

33　ひさかたの光のどけき春の日に　なく花の散るらむ

34 をかも知る人にせむの　松も昔の友ならなくに

35　人はいさ心も知らずふるさとは　花ぞ昔のににほひける

36　夏の夜はまだながら明けぬるを　雲のいづこに月宿るらむ

37　に風のきしく秋の野は　つらぬきとめぬ玉ぞ散りける

38　忘らるる身をば思はずひてし　人の命のしくもあるかな

39　ののぶれど　あまりてなどか人のしき

40　ぶれど色にでにけりわがは　ものや思ふと人の問ふまで

41　すてふわが名はまだき立ちにけり　人知れずこそ思ひそめしか

42　りきなかたみにをしぼりつつ　のこさじとは

－37－

43 ひ見てののちの心にくらぶれば　昔はものを思はざりけり

44　ふことの絶えてしなくはなかなかに　人をも身をもみざらまし

45　あはれとも言ふべき人は思ほえで　身のいたづらになりぬべきかな

46　のをる舟人かぢをえ　も知らぬの道かな

47　しげれる宿のさびしきに　人こそ見えね秋は来にけり

48　風をいたみ岩うつ波のおのれのみ　くだけてものを思ふころかな

49　みかきもりのたく火の夜は燃え　昼は消えつつものをこそ思へ

50　君がためしからざりし命さへ　長くもがなと思ひけるかな

51　かくとだにえやはいぶきのさしも　さしも知らじな燃ゆる思ひを

52　明けぬれば暮るるものとは知りながら　なほめしき朝ぼらけかな

53　きつつひとりる夜の明くる間は　いかに久しきものとかは知る

54　忘れじのくまではかたければ　を限りの命ともがな

55　の音は絶えて久しくなりぬれど　名こそ流れてなほ聞こえけれ

－38－

56　あらざらむこの世のほかの思ひ出に　いまひとたびのふこともがな

57　めぐりひて見しやそれともわかぬ間に　れにしの月かな

58　の風けば　いでそよ人を忘れやはする

59　やすらはでなましものをふけて　かたぶくまでの月を見しかな

60　いく野の道の遠ければ　まだふみもみずの

61　いにしへのの都の　けふににほひぬるかな

62　をこめて鳥のははかるとも　よにのはゆるさじ

63　今はただ思ひえなむとばかりを　人づてならでいふよしもがな

64　朝ぼらけのたえだえに　あらはれわたるの

65　みわびほさぬだにあるものを　にちなむ名こそしけれ

66 もろともにあはれと思へ山桜　花よりほかに知る人もなし

－39－

67　春の夜の夢ばかりなるに　かひなく立たむ名こそしけれ

68　心にもあらでうき世にながらへば　しかるべきのかな

69　くの山のもみぢ葉は　の川のなりけり

70　さびしさに宿を立ちでてながむれば　いこも同じ秋の

71　夕さればのおとづれて　のまろやに秋風ぞく

72　音に聞くののあだは　かけじやのぬれもこそすれ

73　ののの桜きにけり　の立たずもあらなむ

74　かりける人をの山おろしよ　はげしかれとはらぬものを

75　りおきしさせもがを命にて　あはれ今年の秋もいぬめり

76　わたの原こぎでてればひさかたの　にまがふつ白波

77　をはやみ岩にせかるるの　われても末にはむとぞ思ふ

78　かよふの鳴く声に　めぬの

－40－

79　秋風にたなびく雲の絶え間より　もれづるののさやけさ

80　長からむ心も知らずの　乱れて今朝はものをこそ思へ

81　ほととぎすきつるをながむれば　ただの月ぞ残れる

82　思ひわびさても命はあるものを　きにたへぬはなりけり

83　世の中よ道こそなけれ思ひ入る　山のにもぞ鳴くなる

84　長らへばまたこのごろやしのばれむ　しと見し世ぞ今はしき

85　もすがらもの思ふころは明けやらで　のひまさへつれなかりけり

86　けとて月やはものを思はする　かこち顔なるわがかな

87　のもまだひぬの葉に　立ちのぼる秋の

88　ののかりねのひとよゆゑ　みをつくしてや恋ひわたるべき

89　玉のよ絶えなば絶えねながらへば　ぶることのりもぞする

90　見せばやなのあまのだにも　れにぞれし色はかはらず

91　きりぎりす鳴くやのさむしろに　きひとりかもむ

－41－

92　わがはに見えぬの石の　人こそ知らねく間もなし

93　世の中は常にもがもなこぐ　あまののかなしも

94　みの山の秋風ふけて　ふるさと寒くうつなり

95　おほけなくうき世のにおほふかな　わがたつにの

96　花さそふの庭の雪ならで　ふりゆくものはわが身なりけり

97　来ぬ人をまつほのの夕なぎに　焼くやの身もこがれつつ

98　風そよぐならの小川の夕暮れは　みそぎぞ夏のしるしなりける

99　人もをし人もめしあぢきなく　世を思ふゆゑにもの思ふ身は

100　ももしきや古きのしのぶにも　なほあまりある昔なりけり

－42－